

ふれあいお弁当

1

とある町のお話。一人暮らしのお年寄りが多いこの町では買い物に2kmもはなれた駅前に行かなければなりません。バスは2時間に1本、廃止の噂もちらほら出ているそうです。

この町に暮らす A 子さんは、「この町には一人暮らしのお年寄りが14人いて、パンやインスタントラーメンばかり食べている人もいるらしい」という話を聞き、驚きました。「毎日の食料品を買いに出るのが大変だし、一人ではつくる気がしない」ということです。そういえば A 子さんの一軒おいてとなりの B さんも一人暮らしです。

A 子さんは、B さんの家を訪ねました。聞いてみると、天気の良い日にバスに乗って買ってきたお総菜のパック数品を、1週間もかけて少しずつ食べているそうです。見せてくれたパックは賞味期限が切れていました。A 子さんは思案し、「そうだ、私がおかずをつくり、届けてあげたらいいんだ」と思いました。そこで、お総菜のお裾分けを心がけるようにしました。

考えよう

① A 子さんは何に気づいたのでしょう。

② A 子さんは何を始めようと思ったのでしょうか。

2

ところが、しばらくして B さんから「とてもうれしいんだけど、あまり気を遣わないで。申し訳なくて…」と言われてしまいました。

その頃には、お裾分けというよりお弁当みたいになっていたのです。B さんは続けます。「でも、こんな弁当屋さんがあったらいいのにね。そしたら材料費だけでも払ってもらい、お年寄りに余計な気を遣わってもらわないですむのにねえ。」

それをヒントに、A 子さんは近所の主婦友だち数人と自宅の台所で週に1回、お弁当づくりを始めました。町内会長さんをお願いして、チラシを自治会館や掲示板に貼らせてもらったり、回覧板で案内を回すと、7人の高齢者から申し込みがあり、その中には B さんもいました。1食200円をいただき高齢者へお弁当を届けるボランティアグループ『ふれあい』の誕生です。

食事を届けると大層喜ばれ、話し込んだりすることもありました。また、希望者が10人くらいになったころ「市のボランティアセンターで話をして」と頼まれたことをきっかけに、市のボランティアセンターに登録し、隣町からも仲間が増えました。

考えよう

③ A 子さんは誰と何を始めたのでしょうか。

④ A 子さんの活動を誰がどんな協力をしていますか。

3

こうして数ヶ月が経ったころには、希望者は隣町にも広がり 30 人を超えるようになりました。また作り手となる主婦ボランティアも増えたので、配食活動は週2回になりました。

しかし順調だった活動の裏ではたくさんの問題もでてきました。まずAさんの家の台所では狭く、Aさんの家族からも不満がくすぶり始めました。つぎに、お弁当を届ける人手が足りなくなり、お年寄りに機械的な対応しかできなくなりました。以前のように高齢者と話をする余裕はありません。

また、ボランティアが増えたものの全員が主婦でした。子どもの病気や趣味サークルの活動、パートに出る人なども出てきて休みがち。時には「家族で出かけることになったから」と急に言ってくる人も一人や二人ではありませんでした。

そこで『ふれあい』のメンバーで今後のことを話し合いました。他の地域で活動する先輩格の団体やボランティアセンター、市とも相談したりして次のように活動の方向が決まりました。

<活動の方向>

- スタッフ(調理や配送、管理業務)は有償ボランティアとする。
- 配送エリアを学区まで広げて 100 食を目指す。
- 配送は、学区内にあるシニア層の男性ボランティアグループと連携し、車で効率的に行う。
- 調理場所は公民館の調理室を優先的に使わせられるよう市に願う。

考えよう

- ⑤ 「ふれあい」の活動エリアを学区まで広げたのは、どのような理由が考えられますか。

4

こうしていくつかの課題を乗り越え活動の仕組みを整えていきましたが、一方で乗り越えられない問題も残りました。

一つは活動資金の問題。200 円の料金を据え置くため町内会長を通じて学区の自治連合会から資金を援助してもらえないか相談しましたが、一部の高齢者のための活動には援助してもらえませんでした。この学区には若い世代中心の町内会もいくつかあるのです。ボランティアセンターの職員さんの紹介で県が行う福祉モデル事業助成金というのに申請しましたが、この助成は3年間でおしまいとなります。

もう一つの問題は事務を行う場所です。100 人規模の配食を週2回行うとかなれば、注文受付や広報、会計やボランティアの手配など何かと事務が生まれます。それらを行うための場所が必要でした。机と電話とパソコンを置けるちょっとしたスペースでいいのです。公民館にお願いしてみましたが、さすがに調理室のようにはいきませんでした。「条例で特定の団体の事務所としては利用できないことになっている」というのが使えない理由でした。結局、全体のまとめ役となるAさんが自宅で事務をすることにしました。

考えよう

- ⑥ 学区自治連合会からの資金援助を受けられなかったのはなぜでしょう。ほかに何か良い方法があれば考えてみましょう。

5

いくつかの問題を残しながらも、新たなスタートを切った『ふれあい』はいつも笑顔が絶えません。配食の人数も、回数やメニューの種類も徐々に増えました。

活動が新聞に何度か取り上げられるようにもなりました。こうして活動を知った学区のとある人から嬉しい申し出もありました。もと喫茶店だった店舗を次の借り手が見つかるまでなら格安で貸してくれるとのことでした。もともと喫茶店ですからお弁当をつくるにはもってこいです。ここを事務所として、調理場は2か所となりました。

そんなときです。A子さんが B さんに食事を届けに行ったところ、「ありがたい」と言ってくれながらも、なんとなく足りないものがあるような気配を漂わせていました。

話を聞いてみると、思いがけなく「配食サービス」そのものへの不満があることがわかりました。B さんはこんなことをぼつりと漏らしました。「最近、ちっとも外に出なくなった。」「家族以外に顔を合わすのはあなたたちだけになってしまった。」「一人で食べると食事はあまり進まないねえ。」

考えよう

- ⑦ 新しい事務所となった場所はどこですか。公民館との違いを考えてみましょう。
-

6

さらに聞いてみると、お年寄りには、たくさんの思いがあることがわかってきました。そこで、週に1回は、市のボランティアセンターの広い会議室を借りて食事会をすることにしました。

するとなんと毎回 30 人もの参加があり、食事そっちのけで話は尽きません。また事務所店舗でも毎日「ふれあいサロン」と称して喫茶コーナーを始めたところ、A子さんの町のお年寄りもやってきてくれて賑やかになりました。

そして元気なお年寄りはボランティアとしてサロンの運営にかかわってくれるようになりました。三味線の演奏会や、絵手紙など、お年寄りの楽しみも増えてきました。これまで配食のサービスを受けていただけの人も、昔取った杵柄でちらし寿司やおはぎを披露してくれました。

考えよう

- ⑧ 「ふれあい」が始めた新たな活動は何ですか。それらが始めた理由はなにですか。
-
- ⑨ お年寄りにどのような変化がありましたか。それは町にどのような効果がありますか。
-

7

『ふれあい』の活動が元気になるにつれ、Aさんは事務所に籠ることが多くなりました。

複雑になってくる事務や会計の処理、助成終了後の資金の確保などに追われる一方で、「食事の世話だけでは高齢者は幸せになれないのでは…」と最近考えています。

お弁当を配るお年寄りの中には身体や様々な理由で、食事会やサロンにも来られないお年寄りもいるのです。次のステップとして学区内のいくつかの拠点をクルクルまわる移送サービスを事業化できないのかと考えています。移送サービスと配食サービスを組み合わせたら効率的だという目算もあるようです。でも交通関係の法律の壁や採算の問題もあり、なかなか難しいみたいです。

「そういえば、最近 B さんにも会ってないな。これでいいのかなあ、でももっと多くの人が……」と思う今日このごろです。

考えよう

- ⑩ A さんが考える新たな事業をするにはどのような形（組織や範囲、関係者）が必要ですか。
-